

近世史料については、身延山短期大学室住一妙教授のご厚意によって、その一斑を窺うことが出来た。明治期の火災によって多くの史料が湮滅したが、本末関係、寺領関係など、相当良質な史料を発見出来る可能性も大きい。当寺の史料が富士川流域関係史料調査上、極めて重要な価値をもつものであるから、全面的な調査研究に寄せる期待は大きい。

身延山塔頭寺院の調査は昭和三十五年以来実施した。全般的にみて史料に乏しかったが、これは寺院の移動、合併、火災、さらに文書、什物を本山で管理する建前であったことによるものである。

各坊とも近世中期以後の身延山貫首の本尊曼荼羅と過去帳、棟札等が所蔵されているに過ぎない。たゞ東谷の覚林坊は例外で、身延山山内支配、諸行事、諸費用に関する記録、文書、身延山歴代貫首曼荼羅本尊等、塔頭寺院の中では最も豊富な史料を蔵している。又、西谷樋沢坊からは、永禄五年（一五六二）から元禄五年（一六九二）に至る五通の宿坊定書が所蔵されていたことがわかり、さらに端場坊、志摩坊（共に東谷）にも同様に保存されている。これらの史料は本山所蔵の「身延山房跡録並日本国参詣宿房定」（一七一二年、身延山三十三世遠沾院日享筆、日蓮宗宗学余書二十二巻所収）と対応して身延山山内組織の成立史上注目に値するものである。

以上、富士川流域の寺院史料の調査を担当した筆者の中間報告であるが、このような史料の残存状況からみて、現地の徹底的な

史料調査は勿論のこと、しても、本末関係を辿ってなされる相当広汎圏にわたる研究が要求されているのである。

なお、今度作製した身延山々内文書目録は立正大学文学部論叢第十六号に掲載されている。

新宗教勃興の社会史背景

——その条件をめぐって——

妹尾啓司

我が国における中世末期から近世初頭にかけて旧仏教諸派の衰退・墮落に乗じて、新仏教の地方発展やキリシタン宗門の異常に普及した実情について、その社会史的背景のもとこれらを勃興に導いた諸事情について若干の考察を試みたい。そして現代社会における新宗教勃興の因由とも照応してその本質的な相違も究明したい。

さて世界史を通じて新宗教の発生は大多数が既成教団自体の腐敗・墮落・形式化などに対し、殆んどがより現実的・民衆的な要望にこたえて生誕している。古代ヨーロッパにおけるキリスト教の発展にしても迂余曲折はあったが、要して、①世界的・民衆的教義。②宣教師の献身と熱誠。③教会組織の強靱性。④学者の援助⑤精神的世界統一。⑥布教に対する便宜。などがあった。

別にインドにおけるカースト制度の弊害は仏教やジナ教の成立を招き、又西欧中世のキリスト教もやがて人をして救済することから遠ざかったので、これにプロテストして宗教改革が起った。更にカソリックの回復を期しては反動宗教改革も存するが、これらの何れもは民衆的要望にこたえたものであった。

我が国においても奈良・平安の貴族仏教はやがて大衆的な実践性をもつ鎌倉新仏教に交替し、室町時代から近世初期にかけて新仏教の地方波及やキリシタン宗門の弘布など、すべて混乱した時代の期待に応じたものである。

その理由は、①庶民的な教義と信仰本位。②社会的不安のなか精神的拠点。③簡明平易な文章と積極的伝道。④各階層への信者の獲得。⑤講・組の組織。⑥護持発展のために宗論・一揆することなどである。加えてキリシタン宗の場合は、(a)日本人の好奇なる群集心理。(b)キリスト教道徳が不倫無道をいましめる。(c)政治家の利用。(d)社会奉仕・医療救済・学校教育。(e)本国からの財政援助などから一層顕著であった。

実に以上の如き理由が存したが、それらの流布興隆も本質的にはその宗教のもつ崇高な価値にあったと言える。高い価値を有する宗教に接した民衆は必ず多くの帰依者を出すことは当然であると言わねばならない。

次に現代社会にあって流行する新興宗教の特性をまとめてみよう。(一)教義が混淆的 (二)現世利益 (三)在家本位 (四)熱狂的 (五)祖靈崇拜が多い (六)神秘的体験を重んずる。(七)非科学的分子を含む

(八)会員組織、などであるが、なかには軍隊的規律性や、団参・レクレーション・座談会などを有し活潑化している。これらの教義や、入信の動機・会員の獲得・活動についてその詳細を究め、それらの実態も把握しなければならない。

新興宗教が民衆によって支持されている以上、それが低俗であるものならばそれは民衆自体の低俗性を表明するものであり、当然民衆的自覚の上に反省されなくてはならないと思う。一方既成教団の無力化・形式化について改善すべき必要性も痛感するのである。

法華経中の Sarvavantam について

宇 治 行 忠

初期大乘運動を竜樹の時代を境として、法華経の成立をその前としても、それ程古くは無いとすと観方が常識と思われるようでありますが、「法華経は五天竺に流伝して、その論を造る者五十余家、仏滅五百年の終りに竜樹菩薩法華論を造り云々」と真諦三蔵が云った¹⁾と伝えている。この真諦三蔵は Dharmata 2) を姓とする Chinese 国の婆羅門の出である。彼の発言である所に此の伝記は重大な意義があると考える者であります。

梵文法華経の中に Sarvavantam の語が一、二ヶ所ありますが、